



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



初聖体によせて

主任司祭 小西 広志 神父

今年も二人の子どもたちが初聖体でした。わたしの初聖体のことを思い起こすと小学校一年生の時でした。もう半世紀以上も前のことです。クリスマスの日だったのを覚えています。

田舎の教会でしたから日曜学校もありませんでした。ただ、ミサの後に神父さんから時々、お話を聞くことはありました。そこで聞いた内容はだいたい忘れてしまいましたが、今でもここに残っているお話がいくつかあります。ご聖体にまつわる聖人たちのお話です。しかも子どもの聖人たちのお話です。

一つは、初代教会への迫害が激しかった頃、ご聖体を守って殉教した男の子の話です。その名前は思い出せません。でも物語は印象に残っています。ご聖体を運ぶ役目を仰せつかった男の子が、服の下にご聖体を隠して持って行ったそうです。ほかの子どもたちから道ばたで「キリスト信者！キリスト信者！」とはやし立てられ、石を投げつけられたそうです。「隠しているものを出せ」と言われても前屈みになってご聖体を守り通し、ついには死んでいったという話です。わたしは、とても怖い思いをしたのを覚えています。自分だって友だちに教会に通っていると言えませんし、もしそのことが知れ渡ったら近所の子に何をされるかわからないと恐怖を感じていました。だから、堂々と自分が信者であることを表したこの小さな殉教者の話はショックでした。

もう一つは、これも名前を忘れましたが、ご聖体の前で死んでいった少年の話がありました。ある時、ある教会で神父さんが子どもたちに問いかけました。「あと三日で、世界が終わるとしたら何をしたいか？」。子どもたちはビックリして、ある子は食べたいお菓子を一杯食べる、ある子はお母さんと一緒に過ごす、ある子は怖いからベッドから出て来ないなどと答えたそうです。一人の男の子が、自分をご聖体のイエスさまの前で祈って三日間を過ごすと言いました。そんなやりとりがあった日の夕方、一人の男の子が聖堂のご聖櫃の前で跪きながら死んでいたのが発見されたそうです。その子こそ、祈って世の終わりを待つと答えた本人だったというのです。この話も鮮明に覚えています。そして、わたしは、自分だったらどうするだろうと考えると、自信がありませんでした。

そして、もう一つ。福者イメルダの話は好きでした。イメルダは女子ドミニコ会の福者です。修道生活を望んでいた小さいイメルダは、九歳かそこらで修道院に入る許可を特別にいただきます。ご聖体の前で熱心に祈り、ご聖体を熱望したイメルダは、その頃は十四歳にならなければご聖体をもらえなかったのに、特別に十三歳で初聖体を迎えました。そして、ひざまずいてご聖体をいただいて、そのまま死んでいったのです。この話を聞いて、かわいそうとは思いませんでした。むしろ、神さまはいのちを取りあげるんだなと分かりました。

わたしが初聖体を迎えた年は大きな地震があって、怖くて心細い思いをした年でした。寂しそうな円谷幸吉が死んで、苦しうに走る君原が銀メダルを取りました。無表情なガイコツのような川端康成がノーベル賞を受賞しました。札幌で心臓移植の手術を受けたお兄さんの顔は不安げでした。羽田空港の近くの橋で戦争みたいなのがありました。ベトナムという国ではホンモノの戦争がありました。遠くの国でキョーサントウという人たちに反対した人々が死んだと父親から聞きました。その二年前に遠藤周作が問題作を発表して、神父さんも大人たちも密かにそれを読んでいることは知っていました。子どもでしたが、今は生きることと死ぬことが行ったり来たりしている時なんだと感じていました。なぜ、神父さんが子どもたちにご聖体と死を結びつけたお話をされたのか、その理由はわかりませんでした。ただ、ご聖体をいただくことの緊張感のようなものがあることを知らされました。

あれから半世紀以上が過ぎました。あの時に聞かされた三人のご聖体の聖人たちは、わたしのところの中で生きてるように思います。ご聖体は「一期一会」。と言ったら有り体の表現になるでしょうか。「今、ここに」ご聖体をいただくことがうれしく、いのちすらもささげてもかまわない、という終末観です。「一期一会」を説いた井伊直弼は「独座観念」とも説きます。いのちすらもささげてもかまわないといただいたご聖体を、ひとりで静かに味わい、そしてご聖体のイエスさまとの交わりを生きようとするのが聖体拝領のめぐみなのです。願わくは、あの小さな聖人たちのように、ご聖体を生きられますように。